

氏名	和田由樹	
学位の種類	博士(看護学)	
学位記番号	甲 第4号	
学位授与年月日	2021年3月10日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
論文題目	[和文]	副看護師長同士の語りあいによるスタッフへの関わりの変化 - アクションリサーチを通して -
	[英文]	Changes in Relationships with Staff after Peer Dialogues between Assistant Head Nurses: By Using Action Research
論文審査員	主査	大西文子
	副査	河口てる子 (主研究指導教員)
	副査	山田聡子 (第1副研究指導教員)
	副査	野口真弓
	副査	石崎智子

論文審査の結果の要旨

本研究論文において、研究テーマにおける研究目的は、「副看護師長(看護師長直下の職位にある看護職員)が「語りあいの会」に参加することによって、スタッフへの関わりに関する認知や行動がどのように変化するかを明らかにする。」ことであり、何を明らかにしようとしているのかが明確にあらわされている。文献検討では、①副看護師長のやりがいや動機付け、次世代につなぐ副看護師長の育成、職場における副看護師長の振る舞いがもたらすもの、②看護実践現場におけるエンパワメント、③対話から行動に結びつける気づきの有用性、④看護におけるアクションリサーチなどから、知識・概念を含め必要な先行研究について十分に検討されている。

看護学研究の立場からみると、適切かつ妥当な研究方法により明確な成果が得られており、看護実践の質向上、組織の活性化の一助になることが示唆され、学術的な貢献がみられた。また、社会的な意義として、現場に密着した熟達看護師である副看護師長の在り方が看護の質向上に大きく関与するとし、副看護師長が本研究に参加することによって副看護師長がエンパワーされ、組織運営に参画し、その結果、組織の活性化・変革につながることを期待された。この結果は、一般の臨床における看護管理とスタッフへの関係性の構築と看護の質向上につながり、社会的意義を有している。

研究方法は、副看護師長と研究者が語りあいの会を開催することをアクションとしたアクションリサーチ手法を用いた質的記述的研究である。研究参加者は、語りあいの会参加者

の関東圏内の病院に勤務する副看護師長 3 名、およびインタビューのみに参加した看護師及び副看護部長の 8 名、計 11 名である。語りあいの会を 5 回開催し、副看護師長 3 名は全員全て参加した。11 名の研究参加者には語りあいの会開催前、終了後、終了後 3 ヶ月に、半構成的面接法によるインタビューが行われた。語りあいの会のテーマは、「自部署をよりよくするために副看護師長として実践できること」であった。語りあいの会は、参加者は事例シートに記載した事例について説明をしながら、語りあいの会参加者同士の対話によって進行した。語りあいの会終了前 5 分間で、次へのステップシートをその場で各自が記載し、終了とした。研究方法論が明確に示され、説明も十分なされていた。分析は、語りあいの会及びインタビューの逐語録、参与観察記録、次へのステップシートを分析データとした。「語りあいの会を通して何に気づいたか」「副看護師長の実践での変化はあるか、あればどのようなか」等の問いを中心に分析が行われた。結果として、語りあいの会は 5 回開催され、すべての会に参加した副看護師長は 3 名で、看護師の臨床経験年数が平均 23.6 年、副看護師長の臨床経験年数は平均 5.6 年、部署在籍年数は平均 8.3 年であった。そのほかインタビューのみの研究参加者として副看護部長 1 名、看護師長 2 名、主任 3 名、2 年目看護師 1 名、1 年目看護師 1 名の 8 名が参加した。語りあいの会開催時間は平均 96 分であった。第 1 回～第 5 回までの語りあいの会を通して、スタッフを承認することの大切さに気づいた副看護師長は、面接の機会に話を聞き承認しつつ期待することを伝えるようになった。スタッフの思いや訴えを確認することの大切さに気づいた副看護師長は、それを看護師長に届けるようになった。自分の「いいところ」を部署運営に活用できることに気づいた副看護師長は、異動先部署の中での実践に活用していた。また、副看護師長以外の研究参加者からも副看護師長のスタッフに対する関わりの変化を認める語りがあった。これらの結果は、体系的に示されておりわかりやすい。

研究参加者およびデータ収集方法、データ分析方法などは明確かつ具体的に記述されており、妥当なものである。特に、アクションリサーチにおいて研究参加者の副看護師長のほかに、副看護部長 1 名、看護師長 2 名、主任 3 名、2 年目看護師 1 名、1 年目看護師 1 名の 8 名をインタビューしており、アクションプロセスには独創性がある。また、研究テーマ、研究結果などにおいても、本研究はこれまでに研究されていなかった副看護師長を参加者とした内容であり、その育成方法の示唆となる研究成果が蓄積されていないなかで、副看護師長に焦点を当てた本研究の結果には新規性があると判断できる。

考察では、語りあいの会に参加した副看護師長は、「私」を全面にした一人称的語りによって気づきがあり、その気づきからスタッフに対する関わりの変化につながっていた。語りあいの会は、発話のやりとりでは、今まで気づかなかった新たな意味が生み出され、新たな

視点や気づきが生まれており、自己の理解と他者の理解を対比し自分自身の考え方を振り返る(中原,長岡,2009,p.109)プロセスがあった。さらに、本研究による語りあいの会は、普段から一緒にいるわけではない人々が相互に学びあい、持続的な関係の中で成長していく(Wenger, McDermott, Snyder, 2002/2002, p. 335)実践コミュニティであり、副看護師長として「自部署をよりよくするために副看護師長として実践できること」に関する実践知を得る場であった。これらの考察について、引用文献を用いて論理的に導き出し、語りあいの会の実証性を示すことができている。

結論としてまとめると、副看護師長は、語りあいの会で自分の考えを言葉にして語り、その語りに対して問いや応答がなされることによって、副看護師長に気づきがあり、スタッフへの関わりに関する認知や行動に変化がおきていた。その変化により円滑な部署運営、そしてチーム医療の推進がなされることが示唆された。また、互いの考えの違いを否定するのではなく互いの考え方を尊重しあい、マネジメントの考え方を広げていた。さらに、部外者を活用することで自施設の規範や価値を超えた新たな考え方や視点を得る機会となっていた。臨床実践の現場では、新たな思考や行動の獲得がされ、組織の活性化の一助になることが示唆された。

文献検討は適切にまとめられ、課題設定と問題意識の対応は課題解明と研究方法の対応、先行研究整理・評価と結論の整合性などにつながり、論理的一貫性が保たれている。

さらに、学術論文として、章や節の組み立て、脚注や引用文献方法、著作権の配慮などの体裁は保たれている。

なお、学術雑誌における査読付き論文1編以上の掲載などの業績がある。

以上より、本論文は、看護学博士学位論文として、学術的および社会的に意義あるものとして判断され、専門委員会は、博士(看護学)の学位論文として価値あるものと認め、「合格」と判定した。